

芭蕉布，久米島紬の生産形態

——染織経営の原初的形態——

児 嶋 正 男

1. はじめに
2. 芭蕉布の製作
3. 久米島紬の染織
4. 織物生産の原初的形態
5. おわりに

1. はじめに

鹿児島県の地場産業として最も大きな地位を占める大島紬は、それが地場産業として地域に生成した伝統的技法によりながら、他の通常の伝統工芸にはみられない格別の産業的発展を遂げている。戦前、まだ日常衣が和服であった頃、“おおしま”は男の最高の普段着であり、第一次大戦の好況時には、生産高実に74万反を超えるに及んでいる。そしてその後、戦中戦後の衰退期を経て、戦後26年からは次第に復興が遂げられ、昭和40年代以降再び急激な生産上昇をみせて、今日、日常の生活のなかで和服が殆んど着られなくなっているなかで、着尺絹織物に特異の地歩を占めながら、おとろえるところなく発展をみせている。「高度成長」の浪に乗っての、大島紬の需要拡大は、その生産を、奄美大島・鹿児島県の両産地にとどめず、周辺の宮崎、沖縄に拡げ、さらには韓国にまで拡げられる次第にたち至った。大島紬の韓国問題は、地場に特有の地場産業とは何かということについて多くの問題を提起するものであるが、ともかくも、それが、大島紬の類をみない発展、振興に即して生じた問題であることは間違いない。大島紬の韓国生産は、そこに大島紬生産の技法を伝え、同様の製品を作る経営が企てうることによって、同じ流れのなかに身を浮かべることができるからにはほかならない。大島紬生産は、地域に特有の素材と技法とを生産の基礎におくとされながらも、その主要作業を資本制的家内労働として普遍化する限り、それを受け容れる条件のある地域には何処にでも同じように配分しうるし、また真似られ、十分に高度に精練化して編成成立させうることを示しているといえるのではなかろうか。地域に特有の伝統工芸が、地域を越えた工芸となり、さらには人びとの生活の発展に応じて、より広く日常普段の生活の資を容易に堅実に充す産業として発展してゆくことは、決して忌避さるべきことではない。人びとの願いは、より豊かな暮らしを日常のものとするを外れるところにはない。暮らしを充し、暮らしをよりよいものにしようとする日常の生活用具を供する業が、伝統のなかに生きつづけて結実し、長く将来に涉って保持し続けられることを願われる技法こそが伝統工芸と考えられる。産業化の進展のなかにあって、伝

統工芸は社会的分業発展の一環を担いつつ地域とどのように関わりつつ産業として、発展してゆくことを求められているのであろうか。

われわれは地域に根づいて生じた、その地に特殊の伝承の工芸が、社会的必要を充す生産としての産業的発展を遂げ、広く人びとの暮らしを潤すとともに物を作る者がその生産をいとしみながら自らの自立の拠り所とするに欠けることのないことを願う。資本主義社会での伝統工芸の産業的発展は、まずは資本家的企業の下に組み込まれての発展のほかには在り難いとはいえ、なお真の生産者の甲斐ある働きを保つ発展の方向はさぐられねばならないし、生産は、その主体者である働く人びとの手中に確保されていることが基本でなければなるまい。

その昔、大島紬と同じように民衆の家内仕事として生成したであろうと考えられる沖縄県の久米島紬は、今もなお大島紬よりはより遠く資本家的企業の外にある。そして芭蕉布はそれよりもさらに古く、さらに市場より遠い。芭蕉布、久米島紬の現況をみることは、染織業の、引いては伝統工芸の今昔を知り、伝統工芸の経営について考えるよすがとなるのではあるまいか。

2. 芭蕉布の製作

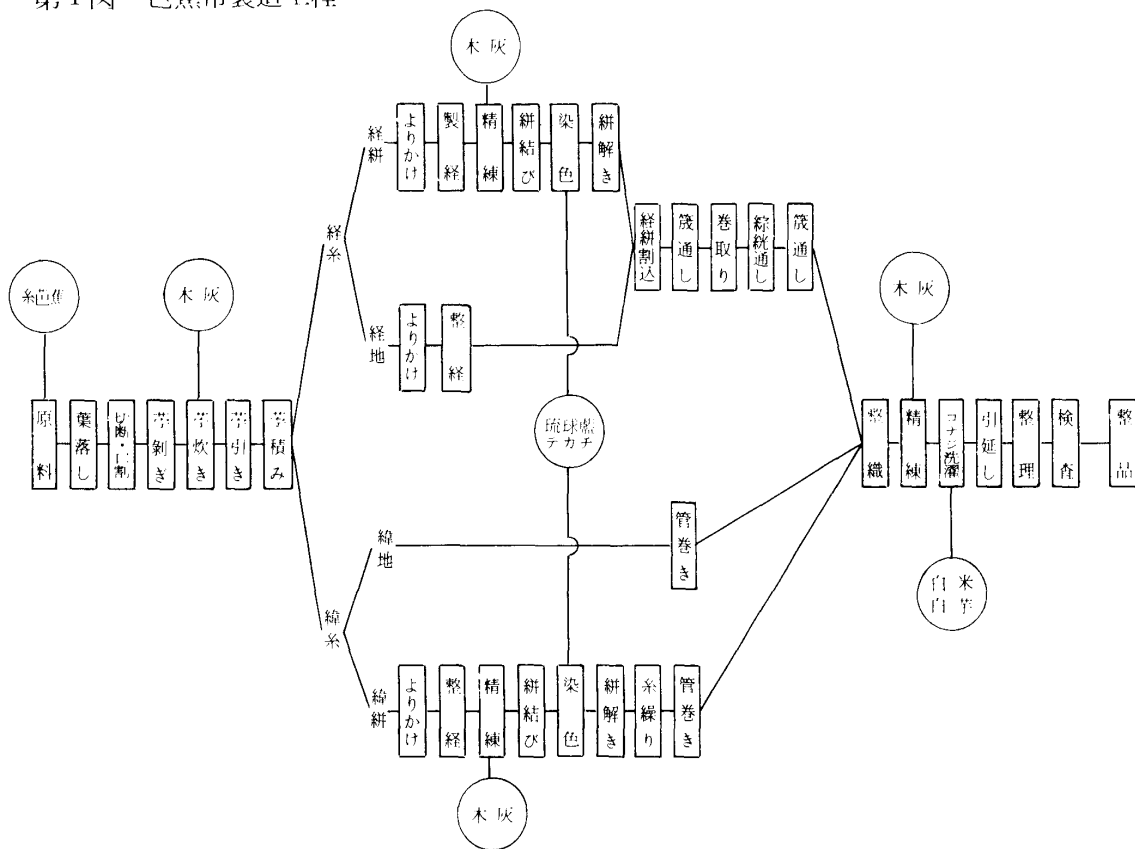
戦後沖縄に芭蕉布の生産を復興し、それを力強く存続させている主導者は、大宜味村喜如嘉の平良敏子さんである。平良さんは幼いときから芭蕉布作りの技法をお母さんから伝授され、また戦争中挺身隊員として本土に動員された後、沖縄に帰るまでの間を外村吉之助氏のもとで織物研究に過される機を得た。郷里に帰られてからは、喜如嘉の地に古くから伝わる芭蕉布を守り育てることに生涯を捧げておられる。喜如嘉に芭蕉が絶えず、芭蕉から糸を取り織物を織る人びとが後をたたなかつたことは、めぐまれたこの地域の環境にもよるが平良さんの沖縄古来の織物を守り育ててゆこうという熱意と指導力が大きい。芭蕉布は正しく、古来の製法を伝承しての伝統染織そのものとしてある。それ故に大量生産の産業とは誠に程遠い生産の形態がとられている。以下、喜如嘉に平良さんを訪ねての芭蕉布生産の実態をみてゆくこととしよう。

芭蕉布はこの地域に古くから作られた庶民の着物である。「絹は自分たちが着るためには織られなかったのですが芭蕉布はずっと働く人びと自らのために自給しつづけたものですよ。文献には1300年代から現われるのですけれど、もっとずっと古くから作られていたに違いないと思います。」と平良さんは言う。たしかに、まゆから生糸をとり、棉を紡ぐよりももっと前から植物の繊維を取り出すことを人は知っていたであろうから、この地域で芭蕉から糸を取り出すことは随分と早く生じ、糸はそのままには着られないから、糸を織ることも同時に古くから行われたに違いあるまい。そして、それが文献に表われるようになったときには、かなり精巧な織物になっており、人びとに称揚されることになったのではあるまいか。芭蕉布はそれが生れて以来ずっと余り生産過程を変えることなく引きつづいて作られ、至って簡素に、それ故に素朴で健康な美しさが崩されることなく、そ

のままに伝えられた織物である。平良さんは、「素材の関係もあって難かしいものは出来ません。ただ昔のままに作っているだけです。」といわれる。

芭蕉布は、いうまでもなく、この地域にのみよく育つ芭蕉の繊維からとる糸を素材とする。芭蕉を育て糸を取り布を織る作業は、古くからこの地域の自然と結びついた生活の普段の業であり、それを次第に巧みなものとして、作ることに用いることの歓びを大きくしながら今に伝え来た。今日、こんなに手間暇のかかる布作りを、何処でも誰でも行うというわけにはゆくまい。

第1図 芭蕉布製造工程



資料：沖縄県労働商工部伝統工芸課

芭蕉布を作るには芭蕉の栽培から始められねばならない。芭蕉布の製造工程は第1図に示されるとおりであり、喜如嘉の芭蕉布保存会では、「芭蕉布のできるまで」としてつぎのように説明している。

1. 芭蕉の種類

芭蕉には、花芭蕉、実芭蕉、糸芭蕉の3種類があり、芭蕉布を織るのは糸芭蕉を使用する。

2. 糸芭蕉の栽培

下葉を落しながら1.5m～1.7m位まで成長させ葉も芯も共に切り落す。その後新しい葉が4枚程でた頃に同じ様なことを3回～4回行う。それは根と先を同じ太さにすると共に糸を柔らかくするためである。

3. 収穫の時期

1年～2年目には古い皮がたくさんかぶさり、根がゆるくなる頃に倒す。9月から2月までは最も良質の繊維がとれる。

4. 苧倒し

幹は地上より20cm位の所を切倒し1mから1.5m位で先を切り落す。25枚～27枚の輪層をなし、ているが古い皮を取り除き、根元を上にして一枚一枚クチワイ（口割）しながらはぎ取る。

ウアーハ（外皮） 5枚～6枚

ナハーウ（中皮） 5枚～6枚

ナハーグ（内皮） 5枚～6枚

キヤギ（芯に近い部分） 2枚～3枚

注 キヤギは他の糸と別々にする。一諸に使用するとむらになるので主に染色用に使う。

5. 苧はぎ

クチワイ（口割）した分は足の先で押え表（繊維）と裏（バサケ）とに分ける。右手の方は糸になる分で40cm位にまげて束ねる。左手の方は皮は干して緋結び用に使う。

6. 苧炊き

40リットル程の水に4リットル～6リットルの上質の木灰を入れ灰汁をつくる。粕を入れないように4枚鍋か5枚鍋に沸騰させ、その上に束ねた分を重ねて煮る。

むらなく煮るため前後何度もまわす。

煮えた時は不純物がどろどろになるので縄の端と端をつかまえてひっくり返し、煮えた分は取り出す。

7. 苧引き

水洗してざるに入れ重石をして水を切る。直径1cmから1.5cmのところを20cm位に切り2つ割りにした竹ばさみ（イエービ）を右手に持ち左手は糸になる分の中間を人差指に1回巻きつけ、中間から根の方へ2回から3回しごきながら不純物を取りのぞき、また中間から先の方へしごいて繊維にする。

注 柔らかいのはヨコ糸用、かたいのや色のついたのはタテ糸用。

8. 干す

繊維にしたのは竿にかけ、すかっり乾かし、小さく束ねる。たて糸用、よこ糸用はしるしをして、別々にとっておく。

10. チング巻き

繊維は根の方から、まり形に巻いておく。

10. 苧積み

小鉢の水にチングをひたした後、かるくしぼり右手にナイフ（シーグ）を持ち右の方に籠（ウンジョーキ）をおいて繊維の根の方を右にして、爪の先で適当に（用途に応じて）分けながらけばだたないように割っていく。

結びは、はたむすびできつくひっぱり結び目は出来るだけ短かく切る。

反物がむらなく出来るのも糸の見分け方によって決まるので籠（ウンジョーキ）を3つ程おいて糸をより分けておく。

11. 燃り掛け

直径 1,5cmの竹を長さ12cm～15cm程に切り、燃り掛機の金具（チミ）の先の方を3cm出し固定させる。かごの糸は根の方が下になっているので上と下をかえして、霧吹きする。

右手は燃り掛機の柄をにぎり、左手は糸をつかまえて下方人の字程度に持って糸をのぼしたまま右手を4回～5回まわすことによって燃のかかった分だけは左手を上にもって行って管に巻く。よこ紺糸は甘く燃を掛ける。

12. 整経

糸むらなくするためにタテ糸用の管を4本立てる。4本わしづかみにすると、もつれて巻ききとりにくくなる。また、ずれて紺が合わなくなるので必ず5本の指の間を通して整経する。ヨコ糸は1本づつ整経する。

13. 煮総

紺糸の分は、木灰汁で煮る。1反分の紺糸用を精練するには、水2リットルに木灰を碗の1杯程入れ、粕を除いた上で、沸騰させこの中に紺糸用を入れ2～5分位煮る。上質の糸ほど精練は早くなる。

（特にシャリンバイ〈赤染〉の場合は精練が足りないと染めつきが悪い。）

精練された糸は十分に水洗してかるくしぼり両端を竿にかけて糸の乱れがないように引っばって乾かす。更に糸のところどころを綴じて、柄によって寸法を組み合わせ（ウチクマス）大綴じをする。

14. 紺結

大綴じをした紺糸用はひっぱり固定させる。（繊維を取った裏側〈ウバサガラ〉10枚程の根を束ねて固くしぼり、釘にかけてつるし上から下に小さくさいたウバサガラで巻きつける。それを紺の寸法に切り、紺糸に巻いてその上を芭蕉糸でかたく結ぶ。

15. 藍の建て方

水10リットルに上質の木灰5～8リットル入れて沸騰させ、いったん冷ます。藍玉の3,5倍～5倍の真水と灰汁（粕を入れないように）泡盛を少々加えてよくまぜる。毎日攪拌する。早い時は10日程度で建つが木灰の質や製造する時の石灰の加減又は気候の関係で2ヶ月経っても建たない場合もある。

醱酵の良否は、藍花の糸によって判断される。紺色を帯びて艶がある時が最良で青色を帯びた時はアルカリ分の濃度が低いので少量の灰汁を入れて加減する。又、濃い紺色を帯びて艶があり、泡が消えやすい時はアルカリの濃度が高いのでデンプン質を少量入れて加減する。

16. 藍染

紺は染める時、操作しやすいように、直径25cm位に柄を合わせながら輪にして軽く綴じる。

染める前にしめらし、8分乾きの時、染め始める。糸がもろいので摩擦しないように静かに上の方で染める。日光に干す。8分乾きの時に取入れ数回おなじことを繰り返す。

17. テカチ染

年数の経った赤味のある木の根元の方がよい。根から幹を20cm位いに切り更に細かくさいてひたる程度の水で5~7時間位煎じる。その間3~4回水を足して、煮つまった液が濃くなったら木灰の上澄みを入れもう一度沸騰させながら別の器にうつす。40℃位に冷めたところで水に浸した絣糸を入れて染める。染め上るまでには40~50回も干したり蒸したりする。染めがにじまないように、また染跡がつかないようにするためには、乾かし過ぎないこと、蒸しすぎないことが大切である。なお干す場合は藍染でも、テカチ染でも必ず平らに干す。

18. 組み合せ

タテ糸は染め上った糸の結びをとき、霧吹きして組み合せ（ウチクマス）元に戻す。

19. 糸繰り

ヨコの絣糸も霧吹きして糸繰り（ワク）に巻き取る。

20. ヨコ管巻き

直径1cm位の竹を20cm位に切り下の方は糸がかかるように矢型にする。これに繊維の根の方からむしがたに巻き適当な大きさになったら2ヶ所を締める。竹管を抜き取って内側の繊維の根の上の方に巻きつけておく。

21. 箆通し

地糸や絣糸を組み合わせ、柄の割りふりをした後、箆通しをする。タテ、ヨコ絣を織る場合はヨコ絣を箆に合わせて柄の割りふりをする。

22. 巻き取り

絣を巻き取る場合は、すれないように巻き取り口をしっかりと結んだ後、巻き取る。

23. 綜統通し

巻き取りに使った箆はずして綜統を通し、織り箆を通す。（箆は例箆通しに使用したのを使う。）

24. 織り

ヨコ糸は水につけて後タテにしぼり、内側の糸から織り始める。絣糸は手結いなので、どんな柄でもずらして柄出しをする。結ぶときに上手に結んでないのや、結び目の荒いのは織る時に非常に苦勞する。又特に寒い日や乾燥しすぎた日などは織りにくい。（機は高機を用いている。¹⁾）

25. 精練

織り上った反物は4枚鍋か5枚鍋に8リットル~10リットルの上質の木灰を入れ8分目程度に水を加えて粕を除き沸騰させる。この沸騰した灰汁にしめした反物を入れて煮るが、この場

1) 大正の初期までは地機を使っており、母たちは地機で織っていました。 平良敏子氏談。

合最も注意したいのは小さな粕のために反物に穴があいたり、むらができたりするので端から端をきり棒でたえずかきまわすようにして煮る（グラグラたぎるように火を燃やす）。良く精練されたかどうかは反物の端を縦にきいてみて、楽にさける程度であればよい。

26. 洗たく

灰汁が出なくなるまで、十分に水洗いし、ユナジでもんで水洗いして干す。乾いたらユナジに2～3時間つけて水洗いして干す。8分乾きのころを見計らって取り入れる。

△ユナジの作り方は、米を水挽きし、白芋（おかゆ）を入れて醗酵させる。酸味を帯びた頃に使用する。

◎ 8分乾きの反物は横と斜めに、引っぱって布目と布巾をととのえる。

◎ 両端をつかまえて引き伸ばす。

8分乾きの時あまり強く引っぱると切れる場合があるので気を付けなければならない。たたむときは2尺づつたたんでいく

◎ 布目や結び目を整えるために湯呑みをふせて力いっぱい押しつけるように伸ばし四つ折りにたたんで暫らく重石をかける。そして陰干しにする。すっかり乾いたら更に布目や布巾をととのえるために横斜めに引っぱる作業をくり返し2尺づつにたたんで重石をのせる。

芭蕉布を作りあげるのはこのような工程を経るのであり、1反の芭蕉布には、およそ40本の芭蕉を要し、それが仕上げられるまでの作業日数は、製糸5日、糸つむぎ20日、よりかけ整経5日、緋結び3日、染色10日、横糸巻き3日、糸取り下ごしらえ3日、織り7日、仕上げ洗濯1日、計57日を要するとされる。

芭蕉布の製作作業は、芋倒しからはじまって仕上げ洗濯に至るまでの全部の作業を順を追って幾人かで協業している。原料素材を準備する作業と、染色・製織などの作業を分担して分業的に行う場合もあるようであるが、大方ははじめから終いまでの一貫作業を通して協業し、最後に各自製織仕上げするのが通常のものである。もともと自家に必要とするだけが必要に応じて手作りする性質のものであったろうから、自分の労働量に応じて始めから終いまで自分の手で作り上げてゆくことを当然の作業方式とし、その方式が今日も同様に引きつがれているということであろう。

もとは沖縄・奄美の家々で広く作られていたであろう芭蕉布も、このような生産方式を伝えて昔ながらに織り続けられているのは、沖縄でも大宜味村だけに限られることになった。そしてこの芭蕉布の生産に従事する者は50人、年間生産高 350反 金額にして 2,450万円、1人当りでは年間50万円足らずである。²⁾ だから、芭蕉布は着尺として織られるものであるが、平良さんが展覧会出品作品として織ったものでも売価は1反僅か8万円～10万円であるから、その原価を計算してみると13万円以上になり加えた手間から考えると、金銭的には全く引き合わないことになる。そこで、この仕事をつづけてゆくため、製品は、

2) 『伝統工芸産業の現状』沖縄県労働商工部伝統工芸課、昭和50年3月。

舌を着尺とするほかに、無地のものを紅型用に、帯、座布団を作って収益を上げ補ってゆくことにしているといわれる。

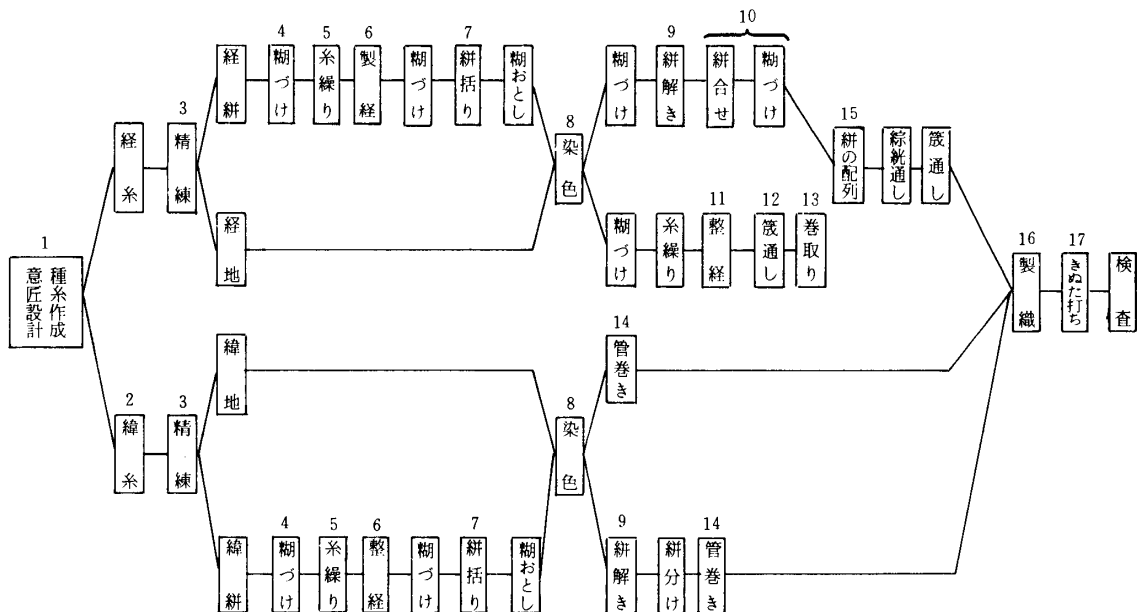
3. 久米島紬の染織

久米島紬と大島紬が同根のものとして発生発展したか、久米島紬に学んで大島紬が生成したか、あるいは別個にそれぞれが自生したとするかは説の別かれるところである。そのことはさておき、今日それぞれの地域におけるそれぞれに特色ある生産手法によって生み出され、産地の地名を冠して、久米島紬、大島紬として、紬としての共通面をもちながらも、それぞれに特色ある製品となっているのが現状である。そして、既に大正年間、久米島女子工業徒弟学校生徒の大島紬視察報告書に指摘されているように、大島紬が紬染織としては大きく変化して発展しているに比して、久米島紬は、現在でも、より濃く伝統的手法が守られており、それはまた伝統的生産形態の枠組みのなかにあると考えられる。

久米島紬の生産工程は第2図に示されるとおりである。このように図式化されると、この全工程が工場生産されているかと考える向きもあるかも知れないが、久米島紬生産の形態は、現代の企業家（資本家）的工場生産の態様とは程遠い。久米島現地における、久米島紬生産の実態を工程の順に従ってみたい。3)

まず、紬の種糸づくりであるが、紬が真綿から手つむぎした紬糸を原料とすることによりその名称を得たこと周知のとおりであり、久米島紬もその点においては伝来の手法が守られている。けれども昔ながらに、地元で出来る繭から真綿をつくり、それから手引きした糸をもって当てるという在来の方式はやや崩れてきている。真綿乃至紬糸あるいは生糸を移入してそれを原料としているのが大半である。しかし近年では、旧来の養蚕からはじめる手法の復活が企てられ、桑の栽培よりする事業の推進が村役場の指導援助とも相俟って漸次進められている。もっとも養蚕からの出発が主流をなしていないとはいえ、なお

第2図 久米島紬製造工程



3) 久米島紬の工程は、『染織と生活 No.8』、染織と生活社、68～82ページに写真によって説明されている。

真綿から紬糸を引くことは行われている。今日久米島紬染織が、在来手法で行われている地域は久米島でも仲里村においてであるが、そこでの紬糸づくりは大体に老婆の仕事であるという。婆が糸を引きそれを材料として嫁が染織の加工をするという次第である。真綿より手引きの方法は、久米島に独特の釘の植わった円い台に真綿をかけて、両手で引きだしながら手つむぎすることが行われている。この方法による紬糸は繊維のからみがよく、腰のある糸が得られるといわれる。⁴⁾ この手つむぎの方法は、つむぎ台はそのままであるが、真綿を手で引き出すにつれて巻き取られてゆくよう回転巻き取り部分を電気モーターを用いての小型機械化が行われている。

真綿からの糸引きは、家庭内での嫁、姑の分業として行われ、また老婆の内職として行われている。こうして引かれた糸は、ついで各家庭での意匠に合わせての種糸作りが行われ、糊づけ、糸繰り、整経、糊づけをへて拵括りとなる。拵括りは一般に4反分の糸を手括りする方法により行われている。しかし男物紬の拵は、大島紬から学んだ締機による織り締めが行われている。そしていよいよ染色であるが、染色は久米島に独特の草木染めである。ユーナ染、ゲール染、テカチ染が、この地にとれる植物の根っこや幹を原料として行なわれ、ゲール染めからテカチ染めをした後泥染めをすることは久米島紬の特色であり、泥染めは久米島紬染色の代表をなす。テカチ(車輪梅)による泥染は、大島紬においても行われている染色法であり、沖縄・奄美に共通して生じた方法であり、さらにそれは八丈島などとのつながりもあるのではないかと考えさせられた。糸を染める染料を作り、染色を行う作業は、一軒だけで行うこともされるが、より多くは、何軒かが一諸になって結(ゆい)によって行われている。本土ではすっかり失われ、奄美でも次第に失われている結による作業がここではまだまだ強く残っている。

真謝の部落を訪ねると、染められた糸が竿に干されている光景がどの家でもみられるのに開け放っしにしたままの家々には全く人の姿がない。どうした訳だろうと不思議に思って、役場の人に尋ねると、今日は部落内のある家に葬式があり、皆そちらに行っていて、各家は留守になっているのだ、とのことであった。伝統的な共同体生活は、まだまだ崩れることなくこの地の生活の根幹をなしているのではないかと、強く印象づけられた。

さて、染色が終り、機織りへの準備作業が整えられると、いよいよ糸は機に掛けられる。機は高機が使われている。久米島女子工業徒弟学校の大島紬視察記に、大島紬では高機が用いられることが特記してあるので、ここではまだ地機が使われているかも知れないと期待していたが、今日用いられている機はすべて高機であった。地機から高機には何時頃から変っていったのであろうかと、久米島にお住いの郷土史研究家、仲原善秀氏にお尋ねしたところ、久米島紬がさかんになるとともに久米島女子工業徒弟学校での生徒志願者が定

4) 『染織と生活 No.8』, 69ページ,

員を上廻ることになり入学者を制限しなくてはならないので、入学資格を高機を持っている者に限るとした明治43年頃から次第に高機になって行ったのではないかということである。その後の急速な高機化は、紬の商品市場拡大に乗っての生産増強策と期を一つにしての変化なのであろう。

久米島紬の製織は今では、経糸は平糸を用いている。もとは経緯とも紬糸を用いていたのであるが、これもまた需要拡大時に生じてそのまま定着したものであるとされる。貢納布として織られたものは間違いなく経糸緯糸とも紬糸が用いられている。⁵⁾

紬が織り上がると、「せんたく」というきぬた打ちの作業が行われる。紬を綿布に平たく包み、石または木の台の上に置いて、二人で向い合って大きな杵で餅をつくように叩くのである。せんたくの途中2回、紬をひろげ長く伸ばして反物の両端を持ち空気にさらして熱抜きをする。そしてきぬた打ちが終るとさらに天日干しする。それをしないと紬にかびを生じることがあるという。

さてこのようにして久米島紬は糸づくりから染色、製織と逐次仕上げられてゆくのであるが、原糸を購入して反物に織り上げて行く工程を全部同一人が順番に工程を追って作業をしてゆくのであり、家事をしながらの全くの家内仕事としてなされるのである。図案から織り上るまでどの位の日数がかかるかについて、新垣久米島紬事業協同組合理事長は、図案1日、染色準備30日、染色30日、整織準備10日、整織20日、1日6～7時間働いて約90日かかるとする。もっとも図案については2疋単位、また染色の工程は、既に述べたように結で行われることが多く、下染めは20疋を2人で、泥染めは10疋を5人でというふうにはほぼ10疋単位以上の原糸をまとめて染める作業が進められる。さらに整織準備は1疋単位であるから、1反換算の染織に要する工程日数は通常約30日足らずということができよう。

真綿1貫目の値段が43,000円、1反の織物には緯（よこいと）は100匁ちよっとで足り、真綿のひき賃は100匁3,000円である。したがって1反分の緯代金は7,300円、経（たていと）は平糸を使っておりその糸代が100匁8,500円、経は約120匁要るから経代が10,200円。すると久米島紬1反の糸代は、17,500円である。そして織られた紬は1反70,000円位で売れる。一通りの簡単な生産用具と織機さえ持っておれば、原糸のほかにお金を払って買うものは殆んどなく、労力を出せば材料も近辺から無償で賄えるのである。そういう労力と原糸以外の材料費、器具費などを2,500円とすると、約1ヶ月間働いて得られる手間賃としての貨幣価格がほぼ50,000円ということになる。それは家事を行いながらの、自分の好きな仕方で遂げられることであるから、まずまずの稼得高だとされている。仲里村における49年度の紬生産状況は第1表の通りであり、1戸当りの生産反数は、1ヶ月に1反というよりは多く、年間約19反、金額にして1,165,600円になっている。久米島紬の染織は従前から女の仕事とされており、男は、染色材料の採取など若干の手助けはするが、染

5) 仲原善秀氏談。

第1表 仲里村 紬生産状況（昭和49年度）

部 落	生産戸数	生産高	一疋当り単価	金額
宇江城	24	217 ^疋	12万円	26,040 ^冊
比屋定	26	244	〃	29,280
上阿嘉	1	6	〃	720
下阿嘉	1	7	〃	840
真謝	116	1,323	〃	158,760
宇根	26	343	〃	41,160
泊	7	40	〃	4,800
謝名堂	31	250	〃	31,080
比嘉	17	174	〃	20,880
真我里	5	10	〃	1,200
銭田	2	13	〃	1,560
山城	2	6	〃	720
儀間	40	272	〃	32,640
計	300	2,914	〃	349,680

資料： 仲里村役場

織の仕事は手伝わぬことが習慣になっているということであるから、これらの金額は女だけによって稼ぎ出されたものである。村全体での久米島紬生産額 349,680千円は第2表にみられる仲里村の生産物中さとうきび 356,850千円に次ぐ生産額であり、村の全生産額を一戸平均した生産額が 1,594千円ということであれば、紬だけで製織者 1 戸平均生産額 1,165千円というのはこの村の生産額としてきわめて高く評価さるべき額である。農業生産のなかで一番高い比重を占めるさとうきびに劣らない生産額をもつ紬生産は、この村では暮らしを支える重要な産業であるということに異論はないであろう。

第2表 仲里村 生産状況（昭和49年度）

項 目	生産量	単 価 円	金額 冊
さとうきび	23,790 ^ト	1 ^ト 当り 15,000	356,850
水 稻 一 期	212 ^ト	19,000	40,280
水 稻 二 期	162 ^ト	19,000	30,780
パイナップル	3,112 ^ト	34,645	107,827
葉 タ バ コ	5kg	1kg当り 1,074	5,477
野 菜	853 ^ト	1 ^ト 当り 70,000	60,050
肉 牛	196頭	1頭当り 280,000	54,880

仔牛	450頭	130,000	58,500
豚	5,250頭	21,500	112,375
山羊	295頭	15,000	4,425
鶏卵	90,000kg	1kg当り 300	27,000
漁類	514,634kg	392	201,968
貝類	135,660kg	450	61,047
水産動物	167,204kg	492	82,289
海操類	93,880kg	159	14,880
紬	2,914kg	一疋当り 120,000	349,680
養蚕	606kg	1kg当り 1,800	1,091
計			
一戸当平均生産額 1,594千円			

資料： 仲里村役場

4. 染織業の原初的形態

人が暮しをしてゆくには、食べることに着ること、そして雨露を凌ぐかくれがを欠くことができない。人びとの集団に力の強い者と弱い者の支配関係ができ、国がつくられると、支配される人びとは、まずは支配権力者のための衣食住を担わなければならない。人びとの暮らしに欠くことのできない織物は、民衆の自己の衣生活を充す以前に、権力者の需めに応じるため、自分の暮しを犠牲にして生み出されることが人びとに強制された。調庸としての織物は、織物についての記録として最も古く表われるものであり古代国家の賦課物の代表をなす。その賦課の対象は正丁といわれる男子であったとしても、実際にそれを生産したのは女子であり、その負担は女子の宿命ともされるところであった。

古代国家にみられる調庸としての織物は、日本の本土では律令国家の時代のことであるが、沖縄では、女子が布を織り貢納することを強制されることが明治後半まで続いたのであった。伝統の巧織の美をなす沖縄の織物の多くは貢納布として作りなされる運命のもとに生じた。

そういう織物のなかで、芭蕉布は庶民が自分たち自らのものとして作りなす古くからの衣料であった。麻や芭蕉を糸に引き織物にする方法は、もとは何処の農家でも行われていたのではなかろうか。原料から織物まで家事の暇々に家内仕事として果してゆくやり方、これが自家用として織物を自給せざるを得ない農家の自然な生産形態と考えられる。喜如嘉の芭蕉布作りも、母や祖母たちがしてきた手法をそのまま大切に今日に引きついでいることに外ならない。だから問屋からの注文があっても、「私は昔から作っているようにするのでせいっぱいです」ということになるのであろうし、実際に芭蕉の栽培から始めると、農業的な生産形態をとることを超えて何をするのかということであろう。工芸品としては正しく商品的生産ではない、自家用の使う人への直接の役立ち、その人にこそ喜ばれる美の追求があるのであり、売らんかなを意図しない価値があるのである。そのような

いわば使用価値創出を目ざしての日々の家事として営まれるあり方、それが芭蕉布の生産形態であり、それはまた、古くからの日本の自家用織物作りの基礎的な作業形態なのである。そういうなかで、同じように家内仕事として行われたのではあろうが、自家用の染織とは異ったもう一つの型をとって生じたのが久米島紬である。

久米島紬がいつ頃から作られ始め、何時頃から貢納されることになったかは定かでないが、現在の久米島紬の起源は、尚豊王時代の寛永九年（1632年）に、王命によって久米島に派遣された薩摩の酒匂四郎右衛門（琉名友寄景友）の指導によるものであろうとされる。この紬の製織指導に先立って、養蚕や桑の手入れ真綿の製法などを坂本普基（宗味入道）に指導させており（1619年）、このことは薩摩から課せられた「真綿三貫目」に関係してのことであると考えられ、酒匂の織物指導も、「紬税」に関して行われたものではないかと推測される。⁶⁾

久米島では紬は「御用布（グイフ）」と称して、地租の一部として代納された。そしてそれは実に明治37年（1904年）の税制改正前まで続けられることになったのである。御用布の製作は、15才以上45才までの女子を上中下の等級に分け、上を一人前の正頭として十分夫、中は八分、下は五分として負担額を配賦した。明治12年の置県後は、具志川間切は旧慣によらず一律に十分の正頭としたが、仲里間切は最後まで旧慣を改めなかったらしく、明治28年の両間切御用布割当の正頭数は具志川が351人、仲里が286となっており、仲里の方が65人少ない。しかし紬の納布額は具志川371反、仲里428反、計799反で、これが明治16年以降の定まった額である。紬の生産反数に比して正頭数が逆になっているのは仲里では上の正頭一人に対して、下の正頭は二人で一人の計算になり、中の正頭は五人で四人の計算になるからである。⁷⁾

「御用布上納（グイフジョーノウ）」は前述のように明治37年頃までつづくのであるが、明治33年5月19日の琉球新報によると、久米島紬の生産高1,590反となっている。これは御用布を含めたものか否かはわからないが、その頃には既に御用布以外の商品生産として製織されていたことがうかがえる。⁸⁾

絹織物は、もともと古くは貴人の衣料であり、近世になっても土にまみれて働く人びとの常用しうるところではなく、また生産を強制する身分的規制のなかではその着用は当然に庶民に許されるものではなかった。だから絹織物の生産は、古くから次第に特定の生産地、つまり支配身分にある人びとの集住地、都市に発展し、そこでの特殊な熟練職人による生産として発展することになるものと考えられる。一般に絹織物は、支配者たちのために、都市に、男子の専門職人による手工業として成り立って行くことに対し、百姓たちの日用衣料である麻織物や綿織物は、村に、女子の家内仕事として普及してゆくことが当然

6) 『仲里村誌』仲里村役場、34ページ。

7)8) 前掲『仲里村誌』、35ページ。

の成り行きとなる。紬はまた、このことの事実を示すあかしでもある。紬の生産地は、絹織物の生産地とは異っており、紬は織物の産地ではなく、養蚕の地に生まれている。つまり紬は繭を売ったあとに残ったくず繭を原料として、糸にならないくず繭を真綿にし、真綿を手引きして紬にするところからその名称が生じた。いわば、繭すなわち絹を原料にするとはいえ絹織物としては位置づけられなかったのであり、それ故に庶民にも着用が許され、百姓女たちによって織られることとなったのである。各地に自生した紬は、もとは麻や綿などとも交織した質素で堅牢な庶民の衣料であったのではあるまいか。

ところで、久米島の紬は前述のとおり、御用布として発生したのである。おそらくは、もっとも自然なかたちで自家の衣料を給する作業を伝習し、自分の役目として、屈託なく果していた、村のすべての女子たちに、新たな技法を教えるとともに御用布としての割当が果せられてゆくことより久米島紬は織られ始めた。たしかに技法はたかめられた、だが御用布の物語りはかなしい。むつかしい紺模様を苦心惨憺の末やっと織り上げ、やれやれと思っていたところその技能を見込まれ翌年またもむつかしい織物を課せられて卒倒する娘の話など村人から何げなく聞かされたが、それはこの様に大量の御用布を織りながら家事を行い、なお暇々に自家用の綿布や芭蕉布を織らねばならず、全く自分の時間などというものはないままに生涯を過ごさなくてはならない境涯に置かれていたことと知られる。久米島では「おつけ紬の貢納布がおしつけられたので、おおかたの婦女子は自分の衣服を織るにも難渋したのであるから…⁹⁾」といわれ、また「芭蕉布が織られ、綿布が織られるようになって、一般庶民の衣服は貧しく、これは旧藩時代から明治の中頃までの話であるが、ある人妻は死んで棺に納めたが、屈した膝頭を覆う着物が一枚もなかったと語られ、ある老人は若い頃から村の役目持ち（村山当や耕作当など）をたびたび言いつかっていたので、間切の番所に出頭することが多かったが、そんな時に着て出る他所行きの着物は、夫婦で一枚しかなかったと語っていた。今頃の人には想像しかねることであるが、結髪の老人が夫婦兼用の芭蕉衣を着て他村へ出かける姿を、明治末年まではよく見かけたものである。…十五才以上の女は貢納布調製の正頭として縛られながら、家族の着物も織らねばならなかったから、女たちは眠る眼も眠らずに苧を績み、綿を紡いで、夫や子供たちの身につける物も作ったもので、その苦勞は想像しただけでも胸ふさがることである¹⁰⁾」と述べられている。

御用布としての紬の強制割当生産の制度から脱して、紬を自由に生産販売できるようになったのは地租改正後のことであり、そこで改めて久米島紬を自前の有望産業として着目することになるのであった。そして明治39年には実業補習学校（後の女子工業徒弟学校）が創立され、その卒業生が送り出される明治43年頃から紬の生産高も次第に上昇してゆくことになった。とはいえ明治44年の「久米島事情」（池口権四郎）では両村で年産6千反、

9) 前掲、『仲里村誌』90ページ

10) 前掲『仲里村誌』、90ページ

その価格2万7千円ということであるから、生産量は誠に少い。ところが、第一次大戦後にはブームに乗り、大正12年には仲里村24,339反、具志川村17,790反、計42,129反に達した¹¹⁾。しかし、いくら作ってもどんな粗悪品でも売れるということによる粗製濫造の見返りは、景気が去り恐慌の襲来とともに不況と不評の二重の打撃を蒙りつて、生産は急激に低下し、昭和7年までは両村で1万余反となり、さらに漸減して昭和12年以後は3千反、2千反となり、生産地も宇江城・比屋定の両字に限られて僅かにその命脈を戦後につなぎえたときれる。¹²⁾

紬が農村に農家の女子の家内仕事として生じたということからすれば、久米島における紬生産の発生もその通りであるが、御用布として、ただ貢納させることのみを目的に各人に割り当てられての生産強制という形態が織物生産において何百年間もとられたことはきわめて特殊であるといえよう。農村での織物の発生は概ねは自家用であり、それが商品経済の進展のなかで商品として産出されてゆく変遷をたどるものと考えられるが、久米島紬の場合はその発生を御用布、貢納布の生産にしている。たしかに、幕藩時代、地域の特産品をこのような生産形態によって貢納せしめる方式は、各地の御用陶器あるいは高知県の御用節（鯉節）のように数多く存したのであろうが、それはきわめて職人的専門的であった。しかし久米島の場合、紬を当初から米の代替貢納品としているように、それは百姓が米を食うことなく米を貢納させられ、黒糖をなめることなく黒糖の貢納を強いられるごとくに、共同体の総隷従支配という生産関係をもっとも直截に示す生産方式によってであった。経済外的強制によって只で召し上げられる方式のこのようないたましい事例が身近かなところにそう遠くない時代までつづけられていたのであった。

ところで、御用布の制度を解かれた久米島紬を、いよいよ商品生産としての家内仕事に変転させてゆく際とられた方策として、まず女子工業徒弟学校の設定を図ったことは、地域における産業振興策として高い見識を示すものといえよう。明治39年4月久米島女子補習学校として、ついで明治40年6月より仲里具志川両村組合立女子工業徒弟学校と改称し大正末年に及んだ模様である。創立より大正11年までの卒業生数は、在籍生徒数 1,341名、本科卒業生 215名、研究科卒業生67名、選科卒業生 207名とされる。¹³⁾ 久米島紬の生産は貢納布として共同体による割当生産の方式がとられた後、直接の商品生産への転換は村をあげてこれに如何に対処するかが考えられ、それが女子工業徒弟学校の設定となり、直接の市場商品生産への徐々なる発展過程のなかでは然るべき成功を収めたものと考えられる。立地条件を最大に生かし、工芸的技法を習得しての農家的生産方式は、マニユファクチュアール、さらには機械工業のように大量生産によって大量需要に応じるわけにはゆかないから、この方式のままでの生産拡大はただ人海戦術以外にはなく、それが限られている

11) 前掲『仲里村誌』, 158ページ

12) 前掲『仲里村誌』 158ページ

13) 前掲『仲里村誌』 212ページ。

とすれば結局は粗悪品を作って市場から排除されることになる。第一時大戦後のブームとその後の衰退はそのことを裏書きしている。その後衣服についての習慣の変化と第二次大戦への突入ということで和服の需要が少くなれば生産の次第なる減退は如何ともしがたいことであつたらう。

久米島紬はさきにみたように、現在もその染織の方法は往年と殆んど変わってなく、生産も部分的に単純協業が行われるにしても、その全工程を初めから終いまで一人で行われるのが通常である。緋も伝統的手法によるもので余り難かしいものはやれない。作業は分業によらないから生産能率も高くはない。古いものがもてはやされる風潮だから久米島紬がよいのではなく、その柄や染色も本当に美しいのであるが、着物として着る人が好むかどうかは別の問題であり、そうであれば伝統工芸としてはこのままでありたいが、産業としては、商品として売れなくては成り立たない。貢納布から今日まで、変わらぬ手法を用いて家内仕事として存続した久米島紬生産は、今新たに伝統工芸品として、どのように産業化が進められればよいのかというなやみを深く蔵している。

5. おわりに

人間生活を豊かにする、まずは第一の基本である衣食のことを対象にして、そこに伝承された生産が豊かに拓かれてゆく方式のなかに一定の論理や方向を見出さんものと、古くから地域に固有の芭蕉布や久米島紬の生産を現地にみようとしたのであつたが、そこでは自然のなかに本当に人間らしく素直に生産することの喜びを感じながら、一方またいいようのない哀しさに襲われることしきりであつた。

久米島の貢納布のこと、これほどに痛ましい歴史を背負っているとは思ひだにしなかつた。苛政は虎よりも猛しというが、島の中で生きるよりほかない人びとは、他に移る手だでもなく、その日々の明け暮れは如何にあつたであろう。そのような暮らしの娘はいつそ沖縄本島へと身を売った方がましということにもなつたのかも知れない。久米島は古い案内書によると紬と遊女の産地であると書かれている。

低い生産力しか持たない閉ち込められた地域における、簡略で徹底した収奪の方法として考案されたかの如き貢納布の制度、延々 300年に涉つて続けられてきたのであつたが、それから解き放たれたという今日、地域への居住も仕事への緊縛からも解かれたところには、目に明らかに見える経済外的強制はないが、それとはなかなか見据えられない経済的法則による遠隔支配については如何なものであろうか。久米島紬も現在は仲里村に織られていて、具志川村の方には紬会社が一社あるほか盛んでない。何故にそうであるのか、これからどのような方向をたどるのが解かれるには、より確かなる視座と視角のもとに調査の回を重ね、地域の方々の懇徳な教示を受けなければならない。

久米島は青少年のスポーツが盛んで、駅伝競争にまた地域の伝統角力に大いに気を吐いていると。豊かな空と海に恵まれ、過去にこの島を隔てたものは今はこの島も利するものになりつつある。これから、より強い生産力を自己の手中にして、地域自立の拠り所を

得ることが達成されればこの上ない。久米島の産業発展のなかで久米島紬はどのように方向づけられてゆくのか見守りつづけたい。